

## ◆基調報告⑤◆

「現代中国とアジア世界の人口生態環境問題」研究会報告  
環境問題に必要な倫理

榎根 勇

＜愛知大学＞

榎根です。どうぞよろしくお願いいたします。私は昨年、天津と北京でも話をしました。私は、皆さんと少し違い自然科学の出身です。環境研究会のメンバーもほとんどが自然科学の方です。これが違う点です。それから環境という非常に複雑なシステムを扱っています。政治も文化も経済も複雑かもしれませんが、環境のほうがもっと何倍も複雑です。そういう問題を扱っているということです。

環境問題とは未来問題です。したがって、過去を振り返ることはあまりしません。多少はありますが、むしろ未来をどのように構築するかということに関心があります。環境問題は細分化されたディシプリンの枠のなかで議論はできません。だから、統合的なアプローチを取らざるを得ません。この点で、おそらく皆さんと違うのではないかと思います。

環境研究会のメンバーは15人ほどです。多少、出たり入ったりがありましたが、それらの方々と一緒に環境研究会という活動をしてきました。また、フィールドワークを実施しました。これは愛知大学のメンバーだけですが、山西省、雲南省、新疆、寧夏、内モンゴル、遼寧省、吉林省などの辺境を回りました。

事例研究もやりました。これも愛知大学のメンバーだけですが、麗江と南京です。今日は麗江の話を行います。

また、中間報告書を2冊出しています。今年も出す予定ですので、詳しい話はそちらを見ていただくということにしたいと思います。

今日、私がお話をする内容は、すでに印刷物になっています。『現代中国環境基礎論』を書き上げましたので、その話をしたいと思っています。これは日本語でまとめてあります。中国語のものもお配りできるはずだったのですが、翻訳が遅れましたので、後日ご覧になっていただきたいと思っています。

最終報告書につきましてはもうできています。明日の環境分科会では、環境の研究発表をするのではなくて、メンバーの方々に報告書を読んでいただいて、感想なり、勝手なことを20分ずつ話していただくという戦略をとっています。

報告書の内容については、12月15日、16日に、北京の中国科学院地理科学・資源研究所の講堂で、改めて2日間かけて発表しますので、そこで、ご自分の研究発表をしていただくことにしています。

今日は、中国語の冊子もできているはずでしたが、パワーポイントは英語で準備してきました。

COEは2002年に始まって2006年までです。この2002年というのが非常に大事な時期なのです。私たちは方法論を構築しました。最初に2002年の時点で、どのような方法をとろうかと思ったときに、道が2つありました【図表4】。

(A) は先ほど来、問題になっています「地域学」です。そこから入って、地域学の一部としての「中国学」に行き、中国の環境問題を研究する道です。このようなアプローチが1つありました。

私は出身が地理学ですから、地域の問題についてはさんざん議論をしてきました。ここから入っても中国の環境問題の議論はできません。できるかもしれませんが、コントリビューション (contribution: 貢献) はできません。それで私は哲学から入ろうと思いました。哲学から入って新しいアプローチ (New approach)、私はこれを日本語で「新しい知」と言っています。そこから中国の環境問題に迫ってみようと、結局、(B) のアプローチをとりました。

ここで問題になるのは、その時点で新しい哲学というものがあったのか、というところではないか、ということではないか。それは、すべてそれ以後に出てきたものです。それ以後、私が読んだものです。だから、私と同時並行的に世界中のいろいろな方がそのようなことを考えていたということです。

環境問題は、近代の後始末だという認識を持っています。まずモダニティ (modernity: 近代) について関心があります。アメリカ人のトールミン (Toulmin) という方が、「モダニティをつくった2人の巨人は、デカルトとニュートンである」と言っています。これについては、ほとんど異論はないと思います。経済学のアダム・スミス (Adam Smith) は、ニュートンの天体力学のまねをして、「あんなにうまくいけばいいな」と思って、「経済学」の基礎をつくったわけです。だから、近代経済学の思想の根底には、この2人の近代の思想が入っています。

そこから何が出てきたのでしょうか。主体と客体を明確に分離したということですが、結局自然と人間を分けたということになると思います。自然は人間に影響しないからから、客観的にそれを記述していきましょう。できることなら数学で記述しましょう。これが自然科学の方法論です。

自然科学の人たちは価値中立性ということを書いてきたわけですが、私たちは価値にはかかわりません。いいとか悪いとか言いません。客観的なことを数学で記述するだけだという領域を自分たちでつくり上げたのです。これは近代の弊害だと思います。

もう1つは、自然を無視することは、自然が人間の心にどのような影響を及ぼすかということは無視することです。単に自然を無視する、自然のものを乱獲してとか、魚を取って食べてとか、森林を切るとか、そういうことではありません。自然が人間の心にどのような影響を及ぼすかを、自然と人間を分離した時点で考えなくなったということです。この2つが決定的だと思います。それにニュートンの決定論です。デターミニズム (determinism) というものがあります。条件が決まれば結果は1つだという考えです。

その立場から今までの20世紀の環境科学をみると、先ほども水俣の話がありましたが、まず「環境問題を告発する」。適切かどうかはわかりませんが、パワーポイントでは英語でプロセキユート (prosecute) を使っています。まず環境告発型の研究がスタートしました。その次に、告発するだけでは解決になりませんから、環境問題を解決するためのミティゲート (mitigate)、少し被害が少なくなるような方法を考えようとしたわけです。

ところが、それでも依然として環境問題は片付きません。その証拠がグローバル・ウォーミング (Global warming: 地球温暖化) です。地球温暖化は、人間の将来に対して深刻な影響を及ぼすわけです。つまり、これは近代の敗北です。

ですから、近代という思想を根本から考え直さないと環境問題は片付きません。今までとられ

てきたものは、全部、対症療法的なものです。根本的な対策はとられてきませんでした。つまり、われわれが必要としているものは原因療法です。

では新しい哲学とは何なのか、ということになりますが、ここで私、4人の方の名前を挙げさせていただきます。ケン・ウィルバー (Ken Wilber) さんの哲学の本は、2000年に原本が出ています。日本語で2002年に翻訳されています。私が読んだのは2004年です。私は哲学の専門家ではありませんから見ていないものもたくさんあると思います。

アービン・ラズロ (Ervin Laszlo) さんの本は2003年と2004年に出ています。これは、一年遅れで日本語に翻訳されています。私が読んだのはそのあとということになります。

清水博さんの『場の思想』は、東京大学出版会の本です。これが2003年です。中田力さんの一番新しい本は今年に出たばかりです。

このような方々の思想というのは、すべてデカルト的な「二元論」を疑う「非二元論」というかたちでまとめることができると思います。しかも、その哲学のなかに、全部、仮説が入っています。哲学に仮説が入るのはおかしいかもしれませんが、入っています。ですから、文句を言う人も出るはずですが、しかし、彼らは信念として、「やがて、これが仮説ではなくなるのだ」と言っています。

では、それはどのようなものだったのでしょうか。まず、ケン・ウィルバーの考え方を簡単にご紹介します。ケン・ウィルバーの考えは、世界を「四象限」に分けます【図表9】。私、原本を読んでいませんから、この英語が正しいかどうかわかりませんが、まず「It」は、日本語では「それ」と訳されています。「They」は「それら」です。「I」というのは、原本では「Me」と書いてある可能性もありますが、「私」。それから「We」の「私たち」の4つに分けます。

「脳」というのは「もの」ですから科学の対象になります。ところが「脳」は「意識 (consciousness)」というものを感じます。これは今、最大の脳科学の問題です。それらが集まったものが社会 (society) です。コンシャスネス (consciousness) の集合がカルチャー (culture) で文化です。

彼は、この4象限に分ければ「万物がこのなかに入る」と言っています。具体的に、右上象限は「客観性の領域」です。右下象限は「間客観性の領域」です。左上象限は「主観性の領域」です。左下象限は「間主観性の領域」です。全部 (万物) が、このどこかに引っ掛かるわけです。

具体的に、科学者が何をやったのかというと、右上象限では、ハード・サイエンス (Hard sciences)、ここには物理学、神経学とか生物学が入ります。下のほうは、システム・サイエンス (System sciences) ですから、ここには経済学とか社会学が入ります。左の上には、現象学とか心の科学が入ります。下のほうは、文化、人文学 (Humanities) が入ります。

そうすると、皆さんは、おのおの1つの象限のなかで一生懸命に頑張っています。今日もそうです。だけど、それで果たして環境がとらえられるのでしょうか。これが私の疑問です。

私は自然科学の出身ですから右上象限のことをわりとよく知っていますが、そのなかで環境がつかまえられるのかどうか、ここが問題です。「Theory of everything」というのは、右側の象限の2つが外面にあるもの、左側の象限の2つが内面にあるものです。上にある2つの象限は個人的なものです。下にある2つは集合的な集団的なものです。

したがって、「これに入らないものはありますか」というと、どこかに入れることができます。ところが、落とし穴があります。

付け加えたいことの1つは、ケン・ウィルバーはスピリチュアルな方で科学者ではありません。

彼は、ほかと関係なく各象限が独立して螺旋的に進化・発達すると言っています。そういう眼で見ると、現在の環境問題は外面にあるもの、右象限の2つが異常に発達をして、左象限にある2つが遅れているというアンバランスからきています。

もう1つ、彼は発達の方向が決まっています、最初は肉体だと。もう少し細かくやっていますが肉体的なもの。心的なもの。さらにそれが発達していくと、魂的なもの、霊的なものへと進むと。現在の科学ではボディー (body) とマインド (mind) は認められています。唯物論の時代は、マインドのことをあまり認めたくなかったようですが、最近の脳科学ではマインドは確実にあるという認識です。

ただし、ソール (soul : 魂) とスピリット (spirit : 霊) は、人によって認める人と認めない人がいますから、この辺は少し議論が出るところです。

私の考えは少しウィルバーと違います。ウィルバーは右下象限に、環境と自然を押し込みました。私はそうではありません。環境は、左上象限以外のすべて、自分を取り囲むすべてだから、環境は3つの象限に配分してもらわないと困ります。一方、自然というものは、4つに全部配分してもらわないと困ります。ここがウィルバーとは違うところです【図表 12】。

自然は情報です。そう言われております。最近、情報は物理的であるともいわれています。さらに進んだ考えでは、情報はエネルギーであるともいわれています。だから、情報とエネルギーは全部に分配してもらわないといけないというのが私の考えです。

そうすると例えば、水というものを考えてみると、水は自然です。ところが、水コミュニティ (A water community : 水共同体)、これは、麗江は明らかに水で結ばれた共同体です。水信仰、水神様というものがあります。それから水文化というものもあります。

したがって、水は4つに配分できるわけです。配分ができれば、当然、情報も4つに配分できるはずなんです。

次にラズロさんについてです。ラズロさんは変わった方で物理学者であり、ピアニストであり哲学者です。国連の顧問も務めた方でかなり幅広い活動をした方です。

ちょっと申し遅れましたが、ラズロさんと私と清水さんはいずれも同じ年です。1932年生まれというのは偶然ではありません。3人とも、量子力学が生まれて、量子力学が確定するまでの過程を自然科学者として生きて、物理学帝国主義の時代でさんざん悩んだ人間なのです。その領域で自分なりの学問をつくった人間は、どうしても同じような考えになるということです。

ラズロさんの考えは「汎心論」です。机にも、犬にも、ウサギにも、部屋にも、みんな「心」はある。ただ「心」のレベルが違うだけだということです。基本的な考え方は、量子力学、量子論 (quantum theory) です。彼が言っているのは、自然界には場があるということです。それは「重力場」「電磁場」「弱い核力」「強い核力」の4つが認められています。しかし、われわれはもう1つ「情報場」というものを忘れていないのでしょうか。これは仮説です。ここが問題です。

彼は、「情報場」があるということを確認しているわけです。われわれはまだ見つけていないだけだと。「アーカーシク・フィールド (Arkashic field)」、これはインドの聖典ウパニシャッド (upaniSad) 哲学の言葉です。わかりやすくするには、「インフォメーション・フィールド Information field」のほうがいいのではないかと思います。

彼は、また量子力学の考え方を入れて、観念論と唯物論は相補的であると言っています。相補性 (complementarity) は、量子力学のキーワードです。一方が正しくて、もう一方が悪いとい

うのではなくて、両々相まって真実に迫るという考えです。

それから、人間と環境はデカルトが考えたように分けることができません。相互作用をします。これは科学的な証拠が出ています。自然は自己生成 (self-evolution) します。いつも同じ状態ではありません。時間とともに変わります。これだけのことを彼は言っているわけです。

中田さんの話は時間がなくなってきましてので省略させていただきます。この方は1950年生まれで、東大の医学部を卒業してアメリカに行き、MR I (磁気共鳴診断装置) の診断を熱心におこない、COEを立ち上げるときにプロジェクトリーダーになった人です。新潟大学へ帰られた後、統合脳機能研究センターのリーダーになった人です。非常に面白い方ですが省略させていただきます。

結局、環境問題を克服するための新しい哲学に基づいた新しいアプローチは何かというと、それに基づいて次なる社会システムをつくることです。これが私の2つのキーワードです。「新しい知」と「次なる社会システム」です。

そのときに、モダニティ (近代) を問題にしましたから、どうしても資本主義を問題にせざるを得ません。資本主義についてもいろいろと文献を読みましたが、私が納得できたのは、東京大学の岩井克人教授です。岩井さんの本は非常に明確です。彼はマネーというものは、あるいは国際通貨として、基軸通貨として通用しているUSドルも、これは全部、デ・ファクト・スタンダード (de facto standard) だと言っています。みんなが認めているから通用しているだけの話ですと。資本主義の利潤はどこから出るのかというと、システムとシステムの差異からしか出ないと。

これも私は納得できます。例えば労働価値説とかありますが、「あれは考えすぎで、そんなものではない、間違っています」と。「当分の間、資本主義に変わり得るシステムは出ないだろう」と彼は言っています。結論として、資本主義には倫理性というものが不可欠ですと。環境問題でも倫理性は不可欠なのです。

私は、岩井さんのものと京都大学の若手の論客の佐伯啓思さんという方に注目しました。岩井さんの考え方は三角形です。つまり、国民国家 (Nation-State) と資本主義があったときに、市民主義という倫理のもう一本の柱がないと安定しません。ところが佐伯さんは、国家と資本主義と、それから社会コミュニティです。

しかし、岩井さんは、コミュニティだけでは資本主義に勝てないと言っています。それを意識してか、佐伯さんは「潜在的価値システム」という言葉を使っています。それは規範とか伝統というものです。それがないと安定しません。

それでは、中国共産党の言っていることをみてみましょう。中国共産党は、国民国家 (Nation-State) は認めます。それから、市場経済 (market economy) を認めたわけですから、資本主義を入れたということです。そのほかに社会主義的市場経済 (socialistic market economy) と言っています。その社会主義的 (socialistic) というところに倫理 (ethics) がくるのではないかと思います。

なぜかという、今、中国のホテルに行くと、大きな看板で「社会主義栄辱観」という掲示があり、「誇らしいことはしてもいいけど、恥になることはするな」と書いてあります。つまり倫理は必要なのです。どうしても倫理という一方の辺がなければ、社会システムというものは安定しないと、みんながそう言っているわけです。

結論は非常に単純です。結論は、日本語ですが、「私たちは自然によって生かされている」。こ

れはテレビタレントの高木美保さんという人がどこかに書いていました。彼女はエコロジストで、イギリスへ行ってこの話をしたそうです。そうしたら、「どうしてもこの日本語は英語に訳せない」と。だから、今、通訳の方がどのように訳しているか私はわかりませんが、「自然によって生かされている」という考え方です。

それで、私は「自然がないと、われわれは生き延びられませんよ」とか、「自然を壊すと人間も壊れますよ」とか言っているだけです。環境問題の根底はここにあります。

そういうものを具体的な地域に当てはめたときにはどうなのでしょう。例えば、麗江であれば水循環、水管理です。三眼井（サンガンセイ）というものがあります。水路の水を広場に氾濫させて、それで掃除をすとかいろいろなことがあります。

それから心の問題でいけば「東巴教」があります。「トンパ教」の根本的な考え方は、自然と人間は兄弟であるという考え方です。

詳しくは、『現代中国環境基礎論』のなかの「麗江古城の環境論」に詳しく書いていますので、興味がおありでしたら、ぜひ見てください。それから、水文化があります。

1つだけ心の問題のお話をしますと、【図表 22】は私がつくった図ですが、原図はソ連がつくった地図です。20 万分の1の地図です。今ならばグーグル・アースでも見ることができます。これを見ていただきますと、麗江古城は図表の右下にあります。麗江古城の水は、麗江の人たちは、「黒龍潭」に貯まった水がくることを知っています。そこから図表にあるように点線を延長すると、ナシ族の聖地である「玉水寨」を通過して、「玉龍雪山」に行きます。不思議なことに直線状にのります。

ですから、麗江の人たちは、自分たちの水は「玉龍雪山」の溶け水であると思っています。先日、NHKが『世界遺産』で麗江をとりあげました。そこでも「とうとうと流れるこの水は玉龍雪山からまいります」とアナウンサーが言っています。これは、私たちの調査では間違っています。この水は、象山という山からの湧水を集めたものが麗江にくるのです。

人間の心は、このようにごまかされるわけです。ごまかされたことによって、麗江の人たちの心には玉龍雪山が自分たちの守り神になり、自然を大事にしなければいけないという意識が生まれているわけです。そういう点も重要だと思います。

【図表 24】は水路です。これは時間がありませんので省略させていただきます。

【図表 25】はそこに水路に引き込んでくる木府という行政府です。ここで明の時代に自治権を与えられて、木氏という首長が政治をおこないました。これは風水の思想です。風水の思想で水を引き入れました。

水という「トンパ文字」を見ていただきますと、「水」という字は、丸があって、葉っぱみたいなものがある、すっと流れるのですが、これは明らかに泉から湧き出してきた水が谷のなかを流れていくという絵です【図表 26】。このような考えは普通の場所では得られません。これは石灰岩地帯の泉から出てきた水が流れて人々の水源として役立っているという自然条件がなければ、このような絵文字は出てきません。

また、「北方」という意味は、山のかたちです。「南方」というのは、水が流れる方向になっています。だから自然は、文化と非常に密接にかかわっているということです。しかも、これは水カルチャー、水文化なのです。

三眼井の1つの例だけを挙げますと、泉（上泉）があって、その水を中泉で受けて、そこでは野菜を洗って、もう1つ下流の下泉では洗濯をします。【図表 28】は同じ泉の写真ですが、よ

く見ると水の濁り方の違いがわかると思います。

【図表 29】は観光客用につくったものです。生活のにおいのない、まったく無用な、お金もうけだけのためにつくったものです。だから、こういうものをつくるということは、いかにナシ族の人たちがつくりあげた「水文化」が貴重であるかということの証明です。

【図表 30】は粉引き場ですが、水量が減っています。自然も生成しますし、また人間が干渉しますから、上流のほうで水道水源を取っていますので、これでは粉引きがもうできません。

【図表 31】のような感じで麗江の町に水がさらさら流れています。さらさら流れていると、なぜ人間は気持ちがいいのでしょうか。それは気を引き込んでいるからです。では、「気は何だ」ということになると、これはまだ現在の科学ではわかりません。

【図表 32】は水を非常に細かく分けていかないと、みんなが平等に水の恵みを得られませんから、このような施設があります。つまり、水の恵みを平等に受けるためには、水を分ける技術というものが必要になります。

何を言いたいかと申しますと、過去には「四象限」の調和が保たれていました。現在は調和が崩れそうです。未来は、果たしてわれわれはその調和を保っていただけるのでしょうか。ここに環境問題の鍵があるというのが私の結論です。

これ以上は、最終日の午前中に総合討論がありますから、そのときに詳しく話をしますが、私が考える新しい中国学の構図は、【図表 34】のようなかたちをしています。現在の研究会は、中国人の心、意識に関する研究会がありません。これは決定的な欠陥です。ところが、情報というものは「四象限」すべてに関係しているわけです。この欠点は、情報のデータベースというものをつくりあげれば、カバーできるのではないかというのが建設的な私の提案です。

以上で終わります。



●司会— 各研究会の主査、時間を守っていただきまして、どうもありがとうございました。まさに、プログラムどおりに進行しています。

ここで 20 分ほど休憩をとりたいと思います。